



日本海上空から望む石見銀山遺跡。銀の積み出し港に
もなった海岸の奥に、銀山の峰々が連なる

(大田市教委提供)



「石州文禄丁銀」。中央に「石州銀」などと刻まれている
(長さ14・5cm、重さ199・5g) 島根県立古代出雲歴史博物館蔵



東アジア海域では、中国商人たちが交易を繰り広げていた。そこへ、11年にマラッカ(マレーシア)を占拠したポルトガルの商人らが参入してくる。当時は、欧洲で人気の高い中国産の生糸や陶磁器。ピントも交易に加わり、見聞した一人だった。

彼らを引きつけたのが日本の銀。高額通貨として中国産品の大容量取引を可能にし、石見銀

はその先駆けになつた」と岡さん。43年の種子島への鉄砲伝来(42年説も)や、49年からのキリスト教の日本布教も、銀を求める商人の渡航がもたらした出来事という。

こうした商取引の末、石見など日本の銀はどうして行き着いた

東アジアの交易で需要

波頭を越えて

開発初期の様子は、地元に伝

日本海を眺望するように、石見銀山遺跡の山並みが続く。戦国時代、石見銀は貿易の対価として、欧州商人も参入した東アジア海域の交易を勢いづかせ、東西交流の触媒ともなった。遺跡の世界遺産登録から7月2日で10年。広大な海を舞台に石見銀が放った輝きを追う。

(林淳一郎)

国期さなかの1526、27年ごろ、この山懐で銀採掘が始まつた。

開発初期の様子は、地元に伝

「銀の島」。16世紀の日本は海外でそう呼ばれたといふ。主役は、大田市に遺跡と文化的景観をとどめる石見銀山だ。大航海時代、石見銀は貿易の対価として、欧州商人も参入した東アジア海域の交易を勢いづかせ、東西交流の触媒ともなった。遺跡の世界遺産登録から7月2日で10年。広大な海を舞台に石見銀が放った輝きを追う。

(林淳一郎)

「神屋の関わりを考えれば、石見銀は博多や平戸など北部九州の港を経て、海外へ運び出された可能性が高い」。東京大史料編纂所の岡美穂子准教授(対

稿)によると、「神屋の関わりを考えれば、石見銀は博多や平戸など北部九州の港を経て、海外へ運び出された可能性が高い」。東京大史料編纂所の岡美穂子准教授(対

稿)によると、「神屋の関わりを考えれば、石見銀は博多や平戸など北部九州の港を経て、海外へ運び出された可能性が高い」。東京大史料編纂所の岡美穂子准教授(対

稿)によると、「神屋の関わりを考えれば、石見銀は博多や平戸など北部九州の港を経て、海外へ運び出された可能性が高い」。東京大史料編纂所の岡美穂子准教授(対

稿)によると、「神屋の関わりを考えれば、石見銀は博多や平戸など北部九州の港を経て、海外へ運び出された可能性が高い」。東京大史料編纂所の岡美穂子准教授(対

稿)によると、「神屋の関わりを考えれば、石見銀は博多や平戸など北部九州の港を経て、海外へ運び出された可能性が高い」。東京大史料編纂所の岡美穂子准教授(対

高額通貨 大量取引可能

日本へ渡航する中国商船の興味深い姿が、明代の文献「越鎔」に表れる。石見銀山が最盛期を迎えていた16世紀後半～17世紀初めごろ、絹や陶磁器を満載した船上に、密貿易を隠すためか、「倭銀」を溶かして形を変える炉やふいごを備え付けていたと伝える。

別の史料「見貯編」は、明の役人が見た石見銀の姿形を記す。クスギの葉形で、石州銀の字がある。朝鮮・明軍と戦つた豊臣秀吉の第1次朝鮮侵略(92～93年)の際、諸大名への褒美用に作られた「石州文禄丁銀」の特徴と似通う。

「記録に残る石見銀の足跡は点々とだが、確かに世界とつながっていた」と松浦さん。広く東アジア海域から捉えること

で、石見銀山遺跡の価値がより鮮明に見えてくると強調する。